

# すべての暴力的関係から 子どもを救う

大津いじめ自殺事件の概要を報道で知るにつれ、1994年11月27日に自宅裏庭で縊死してしまつた大河内清輝君を思い起こす。遊び仲間と見られていたこと、多額の現金を恐喝されていたこと、性的屈辱を受けていたこと、いじめではないかと告げられた教師が事態を深刻に受けとめなかつたこと等々、共通することも多い。なぜ誰かに助けを求めなかつたのか、なぜ誰もいじめを止められなかつたのかなどの疑問も当時と同じだ。教科研では大河内君事件の現地調査をおこなつて『教育』に連載し、その後も何度かいじめ特集を組んだ。しかし大津の事件を機に、あらためて「いじめとは何か」を考えなければならぬ。

いじめるほうもいじめられるほうもいじめと認めようとしないことはよくある。「いじり」という暴力的な遊びの関係が容認されている。暴力被害者が孤立化、無力化させられ、選択肢を奪われていく過程を見抜く観察力と想像力が試される。いじめも虐待もDVも性暴力も、安全が確保されなければ被害者は被害を訴えない。被害者の安全・安心を確保するためのネットワークを学校内外で形成できる人的・時間的余裕も必要だ。

暴力加害者は他方で身体的あるいは精神的な暴力にさらされ続け、暴力的関係からの救出を求めている被害者かもしれない。また虐待などによって暴力に馴化じゆんかされていると、暴力被害を自覚できず被害が深刻化することもある。悪者探しではなく、すべての暴力的関係から子どもを解放することと結びつけて、いじめについて考えていこう。